

日本語アスペクトの研究

日语“体”的研究

孙敦夫 著

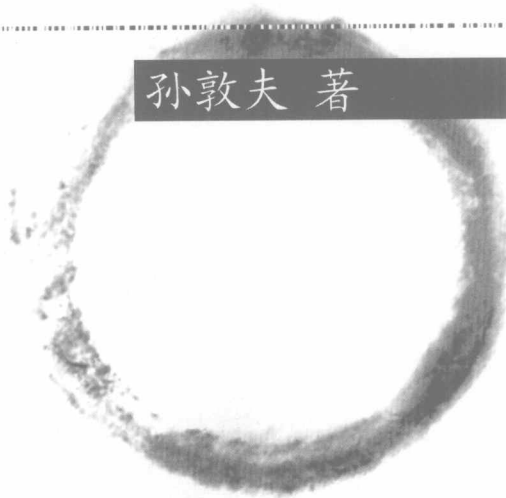
中国社会科学出版社

西安外国语大学学术出版基金资助

日本語アスペクトの研究

日语“体”的研究

孙敦夫 著



中国社会科学出版社

图书在版编目 (CIP) 数据

日语“体”的研究 / 孙敦夫著. —北京: 中国社会科学出版社, 2008. 12

ISBN 978 - 7 - 5004 - 7568 - 2

I. 日… II. 孙… III. 日语 - 动词 - 研究 IV. H364.2

中国版本图书馆 CIP 数据核字 (2009) 第 003469 号

出版策划 任 明

特邀编辑 成 树

责任校对 淳 然

技术编辑 李 建

出版发行 **中国社会科学出版社**

社 址 北京鼓楼西大街甲 158 号 邮 编 100720

电 话 010 - 84029450 (邮购)

网 址 [http: //www. csspw. cn](http://www.csspw.cn)

经 销 新华书店

印 刷 北京奥隆印刷厂

装 订 鑫鑫装订厂

版 次 2008 年 12 月第 1 版

印 次 2008 年 12 月第 1 次印刷

开 本 880 × 1230 1/32

印 张 8.125

插 页 2

字 数 202 千字

定 价 26.00 元

凡购买中国社会科学出版社图书, 如有质量问题请与本社发行部联系调换

版权所有 侵权必究

まえがき

日本語のアスペクトは、日本語の学習者にとって、助詞「が」と「は」の使用と同様に習得しにくい分野であるようだ。本書は日本語を母国語とする研究者の研究成果を吸収しながら、日本語に対する外国人研究者の立場から従来とは異なった視点で日本語のアスペクトを観察し、分析したものである。

1. 日本語のアスペクトに存在する規則性をなるべく帰納的に記述すること
2. 外国語の研究成果を文献的に参照するが、あくまで日本語の特質を重視すること
3. 可能な限り最小限の概念で含有範囲の広いアスペクト現象を説明すること
4. 日本語教育に役立たせること

以上の4点を本書の目標として、筆者がこれまでに発表してきた論文を各章に配置し、新たに書き下ろした部分をも加えて本書を構成した。

各部の内容を簡単に紹介しておくと、第一部「動詞分類」では、アスペクトの面から動詞分類を行った。第二部「非継続のアスペクト」では、従来の研究で言われることのなかった「変化」の概念を「シタ」形の分析に導入し、考察を行った。また、「完了」の意味に対する検討や「点」の観点による非継

続のアスペクトの分析を行った。第三部「継続のアスペクト」では、「テイタ」の持つアスペクト的側面とテンス的側面を述べると共に、「テイル」の持つ非継続的側面、また「テイル」の特質について述べた。第四部「視覚・聴覚動詞の内容節と連体修飾語文におけるアスペクト」では、視覚動詞の内容節における「スル」形の「過程性」と、視覚動詞と聴覚動詞の内容節における連体修飾動詞の形式と意味について述べ、更に連体修飾文における動詞形式の交替とその条件について考察した。

本書を執筆するにあたって、多大なる時間と精力を費やし、ご指導くださった青山学院大学教授の安田尚道先生、近藤泰弘先生の御恩はきわめて大きい。心より感謝申し上げる次第である。

孫敦夫

2008年12月12日

凡 例

1. *の記号が例文の頭に付されている場合は、非文法的な文であることを示す。
2. ?の記号が例文の頭に付されている場合は、非文法的とまでは言えないが、母語話者にとってきわめて許容しがたい文であることを示す。
3. ×の記号が例文の頭に付されている場合は、文法的には問題ないが、その他の要因からきわめて使用されにくい文であることを示す。
4. 例文の後の括弧（ ）中の内容は出典の書名や新聞名であることを示す。なお、新聞名後の数字は日付であることを示す。
5. 注は、各章末に配し、その注の番号は、本文中に（注1）、（注2）……のように右傍に付した。
6. 参考文献は各章末にまとめ、著者名の五十音図に配列した。
7. 例文の番号は各章を単位に通し番号で示した。
8. 出典のない例文はインターネットによるものか、作例であることを示す。

目 录

第一部 本研究の意義、動詞分類

序章 本研究の意義	(3)
1 アスペクトに関する、新たな動詞分類を行 ったこと	(4)
2 日本語アスペクト分析に「変化」概念を導入 したこと	(5)
3 「完了」と「過程」との違いを明らかにしたこと	(7)
4 「テイタ」形には、テンス的側面があるだけで はなく、アスペクト的側面も存在するのを明ら かにしたこと	(8)
5 視覚動詞の内容節において「スル」形が「過程」 を表わすことを明らかにしたこと	(9)
第1章 アスペクトの面からする動詞分類	(11)
1 問題	(11)
2 アスペクトの面からする動詞分類の問題点	(11)
2.1 金田一 1950について	(11)
2.2 奥田 1978について	(12)
3 本書の分類	(17)
3.1 動作性動詞	(18)
3.2 非動作性動詞	(19)

3.3 動作性・非動作性動詞（両様動詞）	(21)
4 三種類の動詞のアスペクト的特徴	(22)
5 まとめ	(24)

第二部 非継続のアスペクト

第2章 助動詞「タ」の意味の一つとしての「変化」	(27)
1 問題	(27)
2 「変化」と動詞分類との関係	(28)
3 「変化」概念の必要性	(29)
4 先行研究における「変化」	(32)
5 「変化」の内容	(36)
5.1 非動作から非動作への変化	(37)
5.2 非動作から動作への変化	(37)
5.3 動作から非動作への変化	(38)
6 まとめ	(39)
第3章 「変化」の概念の普遍性	(41)
1 問題	(41)
2 「変化」と形容詞など	(41)
3 「変化」と動詞	(44)
3.1 物の変化	(44)
3.2 自然の変化	(46)
3.3 人間に関する変化	(47)
3.4 事態の変化	(49)
3.5 時間の変化	(50)
4 まとめ	(51)
第4章 助動詞「タ」の表わす「変化」の特徴	(52)
1 問題	(52)

2 助動詞「タ」の表わす「変化」の特徴	(52)
2.1 非意志性	(52)
2.2 比較性	(54)
2.3 終始性	(56)
2.4 二重性	(57)
3 まとめ	(59)
第5章 助動詞「タ」の「完了」の意味	(60)
1 問題	(60)
2 言い切り文における「シタ」形の意味	(62)
2.1 動作的なもの	(62)
2.2 非動作的なもの	(65)
2.3 動作・非動作的なもの	(67)
3 連体修飾文における「シタ」形の意味	(69)
4 まとめ	(73)
第6章 「点」の観点による非継続のアスペクト	
への分析	(75)
1 問題	(75)
2 点的アスペクトの内容	(77)
3 完了の動作点と未完了の動作点	(79)
3.1 完了の動作点	(79)
3.2 未完了の動作点	(82)
4 変化の状態点と未変化の状態点	(84)
4.1 変化の状態点	(84)
4.2 未変化の状態点	(89)
5 完了・変化の両様点と未完了・変化の両様点	(91)
5.1 完了・変化の両様点	(91)
5.2 未完了・変化の両様点	(94)
6 非継続アスペクトの他の性質	(95)

7	まとめ	(96)
第7章 「完了」と「過程」との相違について		
1	問題	(99)
2	「完了」と「過程」の概念について	(100)
3	時間の種類と動作対象の容量	(101)
4	検討	(102)
5	まとめ	(110)

第三部 継続のアスペクト

第8章 「テイタ」の持つアスペクト的側面とテンス

	的側面	(117)
1	問題	(117)
2	「テイタ」の持つアスペクト的側面とテンス的側面	(118)
2.1	「アスペクト・テンス型」としての「テイタ」	(118)
2.2	「アスペクト・アスペクト型」としての「テイタ」	(121)
3	「テイル」と「テイタ」に見られる対立関係	(127)
4	まとめ	(129)
第9章 「テイル」の持つ非継続的側面		
1	問題	(130)
2	従来のとらえ方	(131)
3	「結果の継続」なのか	(132)
4	「関連付け」の性質	(134)
5	中国語と英語との違い	(141)
6	まとめ	(142)

第10章 「テイル」の特質	(143)
1 問題	(143)
2 「テイル」の基本的性格	(144)
2.1 動的吗、静的か	(144)
2.2 結果的か、非結果的か	(148)
2.3 一時的か、永続的か	(152)
3 「テイル」の特質	(157)
4 まとめ	(158)

第四部 視覚・聴覚動詞の内容節と連体 修飾語文におけるアспект

第11章 視覚動詞の内容節における「スル」形の 「過程」性	(163)
1 問題	(163)
2 分析の対象	(164)
3 範囲設定と動詞分類	(165)
4 検討	(166)
4.1 変化の有無	(167)
4.2 時間上での継続の有無	(174)
5 まとめ	(177)
第12章 視覚動詞の内容節における「シタ」形と「テイ ル」形の意味について	(181)
1 問題	(181)
2 範囲設定と動詞分類	(182)
3 「過程」と局面	(183)
4 検討	(183)
4.1 「シタ」形の表わす起点と終点	(183)

4.2 「テイル」形の表わす継続	(187)
5 まとめ	(190)
第13章 視覚動詞と聴覚動詞の内容節における連体修飾動詞の形式と意味	(192)
1 問題	(192)
2 聴覚・視覚動詞の内容節における連体修飾動詞の形式	(194)
3 視覚動詞の内容節における連体修飾動詞の形式と主文の関係	(196)
4 連体修飾動詞の形式と動詞分類の関係	(204)
5 まとめ	(208)
第14章 連体修飾文における動詞形式の交替とその条件	(210)
1 問題	(210)
2 交替の類型と動詞の種類との関係	(212)
2.1 動作性動詞の交替	(212)
2.2 非動作性動詞の交替	(214)
2.3 両様動詞の交替	(215)
3 交替の条件	(220)
3.1 継続性	(220)
3.2 描写性と不変化性	(222)
3.3 文への関与度	(224)
4 まとめ	(227)
従来の筆者の研究との関係	(229)
参考文献	(232)
出典一覧	(240)
用語索引	(243)

第一部

本研究の意義、動詞分類

序章 本研究の意義

日本語のアスペクト研究は、古く松下大三郎や佐久間鼎によるものも存在した。しかし、本格的な日本語アスペクトの研究はやはり金田一春彦によるものが最初であると言ってよい。金田一の「国語動詞の一分類」および「日本語動詞のテンスとアスペクト」の二論文はその後のアスペクト研究の流れを決定づけたといっても過言ではないだろう。

その後、奥田靖雄およびその影響を受けた研究者（工藤真由美・吉川武時・高橋太郎等）の研究もあり、また更に近年では、金水敏や鈴木泰によるアスペクトの歴史的研究や、工藤等による方言のアスペクト研究なども行われるようになった。

しかしながら、日本語アスペクトの理論的体系の基本的な部分では未だ金田一の体系に大きく依存していると言える。そして、そのことは日本語のアスペクト研究の限界ともなっていると考えられる。本書では、その限界を越えるために次の5つの新しい提案を行っている。

1. アスペクトに関する、新たな動詞分類を行ったこと
2. 日本語アスペクト分析に「変化」という概念を導入したこと
3. 「完了」と「過程」との違いを明らかにしたこと
4. 「テイタ」形には、テンスの側面があるだけでなく、アスペクト的側面も存在するのを明らかにしたこと

5. 視覚動詞の内容節において「スル」形が「過程」を表わすことを明らかにしたこと

次に以上の5つについて概観する。

1 アスペクトに関する、新たな動詞分類を行ったこと

動詞の語彙的な意味とアスペクト的形式との関係に目を向けた論文はこれまでに数篇見られるが、本書ではその内の二篇を取り上げ、検討した。一篇は金田一春彦 1950で、もう一篇は奥田靖雄 1978である。工藤真由美 1995にも動詞分類が見られるが、その分類は基本的に奥田靖雄 1978と同じであるため、取り上げないことにした。

金田一 1950の問題点は二つあると考える。その一、「テイル」という単一の語形によって大部分の動詞を「継続動詞」「瞬間動詞」に分類している。その二、「行く」「帰る」「入る」「座る」「寝る」などの動詞が不問に付されていることである。

奥田 1978の問題点は、金田一 1950の分類基準を批判し、アスペクトに関する動詞分類はただ「テイル」形だけではなく、「スル」形も参加すべきだと主張しながらも、結果から見れば、相変わらず「テイル」形だけによって「主体の動作」「主体の変化」という分類を行った。その理由は「主体の変化」動詞の中には、「行く」「帰る」「座る」「死ぬ」「煮える」「壊れる」「倒れる」などのように「スル」形で動作そのものを表わすもの（「行く」「帰る」等）もあれば、動作そのものを表わさないもの（「壊れる」「倒れる」等）もある。「行く」「帰る」などの動詞は「スル」形で「主体の変化」より「主の動

作」を表わす「歩く」「走る」などと同じく動作を表わすものであると考える。

金田一 1950 と奥田 1978 の共通した問題は、複数の語形によって動詞を分類するという形態論的視点が足りなかったことと、具体的方法論の面では、基本的に“A 類でなければ、B 類だ”という二分法を使用することである。私は、アスペクトに関する分類は「テイル」形と「スル」形といった複数の語形による分類が必要であり、三分法を以って分類を行えば、両論文の不備を補強し得るのではないかと考える。

具体的に、動作性か非動作性かという基準で、大多数の動詞を「動作性動詞」（読む、歩く等）と「非動作性動詞」（壊れる、倒れる等）にまず分け、その「行く」「帰る」などの動詞を第三の分類として「動作性・非動作性動詞」（両様動詞）に分けることにした。これらの動詞の特徴は「スル」形で動作性を実現するが、「テイル」形で動作の結果による状態の継続を表わすことにある。これらの動詞は奥田 1978 で言う「主体の動作」動詞と「主体の変化」動詞の両方にまたがる性質を持つものである。この三分法によって、金田一 1950 と奥田 1978 の問題点が解決できたと考える。

2 日本語アスペクト分析に「変化」概念を導入したこと

助動詞「タ」には、「過去」「完了」という二つの主要な意味があるとされている。しかし、この二つの意味を以って、「私が偶然其樹の前に立って、再びこの宅の玄関を跨ぐべき次の秋に思を馳せた時、今迄格子の間から射していた玄関の電灯がふっと消えた」（こころ）という文中の「消えた」を説明す